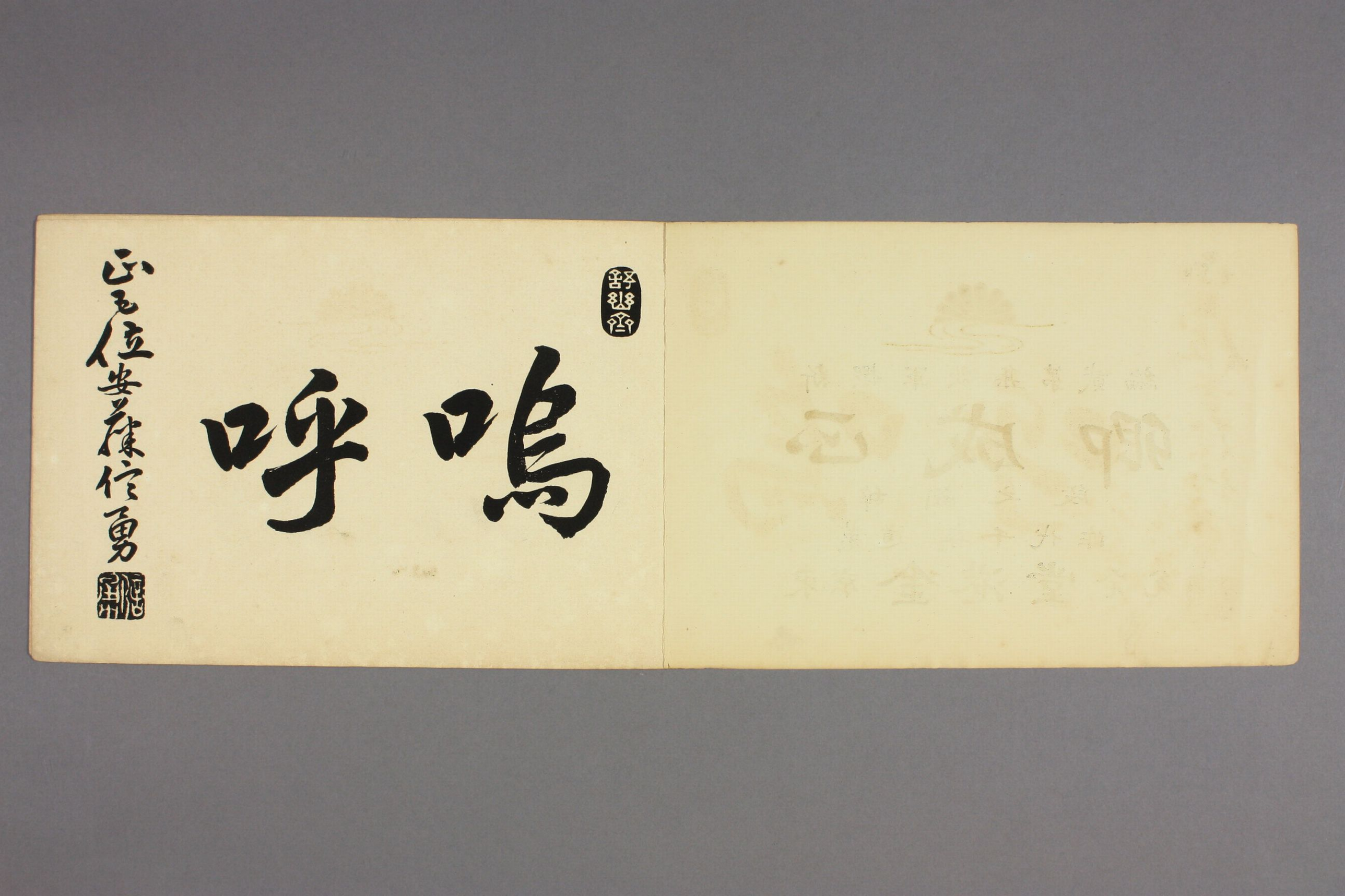
新撰軍歌集第貳編

凱成歌

段之瀾辭

千春道菟作

東京金港堂発兌


嗚呼
正五位安藤信勇

忠臣

右庚寅式

新撰軍歌集第貳編

東京　菟道春千代　作

正成卿（辭闕之段）

第一節

嗚呼忠臣の楠氏ぞと
ほまれぞのこる湊川
頃は延元元年の
今もなみだに袖ぬるゝ
此川上の賤の家に
赤き心もくれなゐの
抑もたゝかひの本末は
京都を犯しまつらんと
西國よりぞ進み來る
攝津兵庫に陣ずれど
殊にすぐれし者なれば

万世くちぬ石碑に
其源をたづぬれば
五月の二十五日とや
時しも梅雨に水嵩增す
南朝無二の忠臣の
血汐にそみて果たりき
逆臣足利尊氏ぞ
九州勢を引つれて
此を拒がんと義貞ハ
彼は名たゝる大軍の
彼の蟷螂が斧ふりて

隆車に向ふごとくなり
勅詔してのたまはく
新田を扶けともぐくに
賊を討てよと仰せらる
皇帝に申しあぐるやう
此たび賊は去らぬひの
その勢もいとつよ〜
疲れもつよく弱りたり
如何で向はん樣やある
敗れを取らば悔るとも
疾く義貞を召かへし
行幸あるこそ宜しけれ
おびき入おき其中に
諸國の兵をめ〜あつめ
糧道たゝばなにほどの

されば皇帝は正成に
汝今より疾く行きて
力をあはし彼處にて
正成恐れかゝこみて
臣つら〳〵と思ふには
筑紫の軍ひきぬきて
それに引かへ我兵は
然るを今また大敵に
いまなまじひに戰て
詮なきことに候へば
一たび君は叡山に
かくて帝都に賊兵を
臣は河内にたむろ〜て
賊の河尻うちふせぎ
强兵とても挫けなん

その時正成前後より
御方の勝こなりぬべし
かならず斯や思ふらん
終りの勝ぞかなめなる
召させ給へと申しゝを
皇帝にすゝめ奉り
帝都の外またゝかひを
皇帝ハ實にと思しめし
然らば汝も出陣の

第二節

正成朝臣はいまさらに
甲斐なき事と思へども
是にそむかば違勅とて
然りとてこれに從はゞ
實にこゝろなき清忠が

攻かゝりなば忽に
彼の義貞もこゝろにも
唯戰爭ハはじめより
されば早くも義貞を
御側にありし清忠は
是非ゐ正成つかむ〜て
決〜給へと申すにぞ
其言の葉を聽きたまひ
準備をせよと仰せらる

返す言葉もなまよみの
勅詔をば如何よせん
不忠の臣と呼ばれなん
わざはひ君に及びなん
さかしら言ぞ口をしき

元より我はあだし野の
命惜むにあらざれど
如何に成行世なるらん
攻のぼりたる賊兵を
鬼にもかくにも大君の
兵庫にいたり尊氏と
思ひさだめて遙のにも
夫れといはねど心には
拜すべしとも覺えねば
いとゞ名殘の惜まれて
氣をはげまして退いで
せきくる胸を押へつゝ
伏見にいつか着にける
里とし聞けば暫時だも
波もむかしに立かへる

（四）

露と消ゆるも露ばかり
我世をさりし其後は
さはさり乍ら目の當り
討たで止べき時ならじ
仰せの儘に身をゆだね
いで一戰をせんものと
龍顏拜みたてまつり
生てふたゝび御顏を
さすがに猛き武士も
出ゆく足はすゝまねど
帝都をあとになみだ川
西にむかへば吳竹の
往昔常盤が色かへし
足やは止めん芹川の
例をこゝにながめつゝ

淀の川瀨のよどみなく
森の下草老ぬれど
人のこゝろのきつね川
關戸の院のほとけあり
うちながむれば遙にも
高くそびゆる山崎の
伏拜みても祈るかな
御世をむかしに引返し
額づく間さへ水無瀨川
行けば程なく津の國に
驛路にこそ着きにけれ

下りゆくてに大荒木の
苅人もなくいぶせきは
渡りてゆけば此處に又
志ばし御寺に休らひて
見ゆる高嶺は男山
八幡の神の廣前に
弓矢の神と聞くからに
靜けき春になさせよと
水無瀨の御前伏をがみ
その名榮ゆる櫻井の

新撰軍歌集第貳編終

東京　菟道春千代　作

楠母慈訓之段

やよや止まれ正行よ
父の臨終のことの葉を
母にもつげのさし櫛の
春を待ちしに思ひきや
いそぐ黄泉の旅のそら
消る習ひの世なりとて
父うへ汝をかへしゝは
君の賜ひし仙人の
菊のかざりの刀こそ
永くとたのむ命なれ
露と消にし父のあと
小草のかげのなき魂の
稚けれどもちゝのみの
忘れて歸りたらちめの
さしも若木の榮にゆく
人の心を志らまゆみ
草のまくらに露の床
はかなく成ば如何せん
深き心のあればなり
齢をのべしためしにも
身は短かくも菅の根の
さりとて仇に仇し野の
吊ふとても苔の志た
怨みは晴れぬ月のかげ
皐月の空を落かへり
志でとし聞けば袖濡て
汝を人となしてのち
下父のため賊を討ち
其を樂みにながらふる
死ぬるこゝろを反對に
刀持つ手に取りすがる
襟かきあはし居直りて
許し給へとわぶるにぞ
涙にくれて居たりける
世を憂き事に思へばや
あさくも死して亡跡を
其あやまちを改めて
忠孝ふたつを全うせん
安んじ給へと云ければ
啼く音悲しき鳥の名も
存在ふべくも有ぬ身も
上すべらぎの君のため
ふかき怨みを晴さする
身の苦しさを思ひやり
忠と孝とにつくせよと
母の心を汲みはかり
よゝとばかりに泣沈み
おなじ嘆きよ母もまた
朝臣はおもひ直しつゝ
心せまりて山の井の
深くも思ひはからざる
今よりつれに忘らず
母上かならず御心を
母は嘆きをよろこびに

代ふる顔笑ましげに　その一言を末なごく
忘れたまふな忘れじと　かはす言葉ぞ頼母しき
是をりのちも正行は　心たゆまず年を經く
父もろともに世に薫る　花橘はとこしへに
千木たかぐゝと玉垣も　こゝやき渡る河内路や
四條畷の神社とて　官幣社まぞ列ねらる
これみな母の教訓の　厚き故まやありぬらん
世の少女等もこの母の　高き功をたたひつゝ
女たる身のこゝみぞと　つねぐ仰ぎ尊とめを

新撰軍歌集第貳編附錄終

新撰軍歌集各編目錄表

第壹編　**正行卿**　四條畷之段　〜定價一冊金貳錢　〜附錄「吉野靜」一篇
●本編は吉野皇居退出に始り四條畷戰死に終る

第貳編　**正成卿**　辭闕之段　〜定價金貳錢五厘　〜附錄楠母慈訓之段
●本編は忠諫用ひられず闕を辨して西向する一節なり

第參編　**正成卿**　櫻井訣別段　〜近刊
●本編は前編を承け櫻井驛に於ての遺訓を作詠す

第四編　**正成卿**　湊川戰死段　〜近刊
●本編は櫻井驛發向に始り湊川戰死に終る

明治二十四年七月十二日印刷
明治二十四年七月廿三日出版
明治二十四年九月　四日再版

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊正價金貳錢五厘＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

著作兼發行人　東京市牛込區市ヶ谷柳町二十六番地寄留　菟道春千代
發行人　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　原亮三郎
印刷人　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　日置九郎
發兌　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂本店
大賣捌　大阪市東區南本町四丁目二百廿一番屋敷　金港堂支店
同　宮城縣仙臺市國分町五丁目百卅壹番地　金港堂支店
東京新橋流山町瀛闕社印行

版權所有